

表情認知における注意欠如多動症傾向と スキャンニングパターンの関連

出水 志緒梨[†]北条 直樹^{††}滝口 哲也^{††}中井 靖[†][†] 京都女子大学発達教育学部心理学科^{††} 神戸大学大学院システム情報学研究所

1. はじめに

注意欠如多動症 (ADHD) は不注意または多動-衝動性によって特徴づけられる障害である[1]。ADHD は対人コミュニケーションの困難さを生じやすく、その要因に独特な表情認知パターンが考えられる。一般に相手の表情を認知し、その感情を判断する手がかりは相手の目と口にある。怒り・悲しみ・恐怖・驚きは目を、嫌悪・喜びは口を手がかりとする[2]。ADHD は口を手がかりとする嫌悪・喜びの表情同定は良好であるものの、目を手がかりとする怒り・悲しみの表情同定は成績が低く、目の注視時間も短い[3]。しかしながら、ADHD の下位分類の不注意、多動-衝動性による検討はされていない。そこで、ADHD 傾向と表情認知における視線スキャンニングパターンの関連についてアイカメラを用いて検討した。

2. 表情認知の解析方法

女子大学生 89 名 ($M=19.42$ 歳、 $SD=2.00$) を対象に表情認知の解析を行った。参加者の ADHD 特徴を数値化するため、Conners' Adult ADHD Rating Scales 日本語版 (CAARS) による自己記入式質問紙調査を行った。質問項目は 66 項目あり、結果から ADHD 傾向、不注意特性傾向、多動-衝動性傾向を数値化した[4]。

表情認知課題では、(1) 注視点「+」を 1500ms 提示、(2) 白画像を 150ms 提示、(3) AIST 顔表情データベースの日本人男女各 4 名計 8 名の顔画像からランダムに 1 表情ずつ 5000ms 提示し、その感情を回答するよう求めた。8 名×6 感情 (怒り・悲しみ・恐怖・驚き・嫌悪・喜び) の 48 試行実施し、参加者の視線スキャンニングパターンをアイカメラ (Tobii Eye Tracker 5) で測定した。

3. 表情同定率結果

不注意傾向高群は 10 名、多動-衝動性傾向高群は 13 名、両高群は 29 名であり、これら 3 群を合わせたものを ADHD 傾向高群 52 名とし、両低群を ADHD 傾向低群 37 名とした。6 感情の分散分析の結果、ADHD 傾向高群-ADHD 傾向低群、多動-衝動性傾向高群-ADHD 傾向低群の間に表情同定率に有意差が認められず、不注意傾向高群-ADHD 傾向低群の間には怒りの表情同定率のみ有意差が認められた (図 1)。

このことから、ADHD における怒りの表情同定成績の低さには不注意が関与し、多動-衝動性は関与しないことが示唆された。

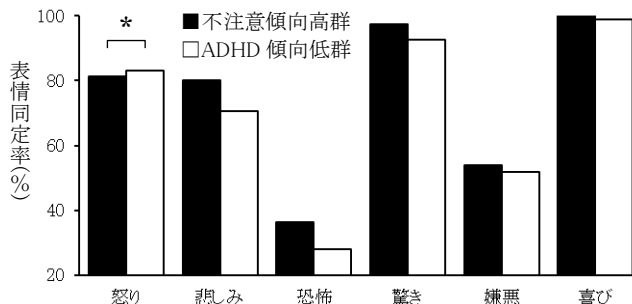


図 1 不注意傾向高群-ADHD 傾向低群の表情同定率

4. 視線スキャンニングパターン結果

目・口の注視時間、視線速度、視線距離のすべてについて ADHD 傾向高群-ADHD 傾向低群、不注意傾向高群-ADHD 傾向低群、多動-衝動性傾向-ADHD 傾向低群の間に有意差が認められなかった (図 2)。

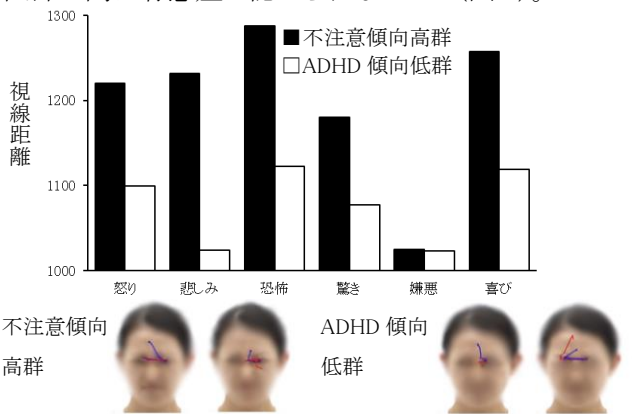


図 2 不注意傾向高群-ADHD 傾向低群の視線距離・視線軌跡

5. おわりに

ADHD における表情同定成績の低さに不注意が関与し、多動-衝動性は関与しないことに目・口の注視時間、視線速度、視線距離は影響を及ぼさなかった。今後は ADHD 特徴以外の要因や課題設定要因も検討する。ADHD の表情認知メカニズムを明らかにすることで対人コミュニケーションの改善につなげる一助としたい。

参考文献

- [1] 高橋ほか (監訳), "DSM-5-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル," 医学書院, 2003.
- [2] J.D. Boucher, *et al.*, Journal of Communication, 25, 32-49, 1975.
- [3] K. Pelc, *et al.*, Pediatric Neurology, 35, 93-97, 2006.
- [4] 中村ほか (監修), "CAARS 日本語版マニュアル," 金子書房, 2012.